

(社)日本都市計画学会都市計画論文集 No.39-2,2004

CVM を用いた文化資本の定量的評価の試み 世界遺産富山県五箇山合掌造り集落の事例 (アブストラクト)

Quantitative Evaluation of Cultural Capital using the CVM
-The Case of the World Heritage Villages of Gokayama, Toyama-

垣内恵美子*・西村幸夫**

富山県五箇山合掌造り集落(世界遺産)を事例として取り上げ、その文化的景観の保護に対する観光客及び全国民の支払い意志額をCVM(2段階2項選択方式、ランダム効用モデルによる分析)を用いて計測した。この結果、文化的景観は、遺贈価値や存在価値を中心とし、極めて大きな社会的便益を有すること、その便益は属性(学歴、居住地、性別等)に関わらず全国的な広がりをもっており、文化資本としての景観に投資することは広範な人々の間でコンセンサスが得られるであろうこと、また観光客は便益の受益者であるとともに、潜在的な寄付者及びボランティアになりうること、等が確認できた。これらの結果に基づき、景観保護のための可能な制度設計を試みた。

* 政策研究大学院大学教授

** 東京大学教授